



中央コーポレーション 2015-2025

10年間の変革と成長





CHUOH
CORPORATION

60th ANNIVERSARY

あの時、今、未来へ —東日本大震災後の復興工事を乗り越え成長したわが社—

座談会 #1



平成 23 年（2011）3 月 11 日に起きた東日本大震災により多くの方が犠牲となりました。岩手県では 34 市町村のうち沿岸 12 の市町村が津波の猛威にさらされました。改めて亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

中央コーポレーションは、被災した従業員や家族がいなかったものの、震災を境に多くの試練と困難に立ち向かうことになりました。今、創立から 60 年の歩みを振り返る時、会社の歴史が大きく転換した出来事だったといつても過言ではありません。

被災地で数々の復興工事に携わった足跡はまさに「復興の歩み」そのものだったといえるでしょう。復興工事を手掛けたことで地域に貢献できただけでなく、技術や知識も格段に向上し大きな物件を完遂できる力を培いました。

改めて中央コーポレーションの震災体験や復興工事を後世へ伝えるため、当時の様子や思いを語り合い、ここに記憶と記録として残します。



佐々木 史昭 社長
(当時: 代表取締役社長)



菅原 博 専務
(当時: 常務取締役)



菅原 克彦 常務
(当時: 株式会社岩手銀行)



高橋 孝典 常務
(当時: 工事課課長代理)



あの時、私たちに何ができたか 中央コーポレーションそれぞれの 3.11

佐々木社長 本日は、60 周年記念誌制作にあたり、10 年を振り返り記念座談会を開催致します。テーマは「震災復興」と「関東営業所の開設」の 2 つとし、座長は私が務めます。当時を振り返っていただいて、とくに印象に残っていること、エピソードなどを自由にお話しいただければと思います。私からまず一言述べますと、震災前と比較して、よくあれだけ大規模な工事を、岩手県当局が地元企業に元請させることを決め、発注し、無事受注し、施工・完成させられたものだな、という思いがあ

ります。それまで当社や鉄構業界、岩手県当局が、積み上げてきた様々な実績をベースに鉄構業界が信頼を得て、震災復興を契機に一気に状況が進みました。まさに歴史の転換点であったと思います。まず専務から何でも結構ですので、お話しください。

菅原専務 東日本大震災の 2 日前に震度 5 強の地震がありました。私は水沢で業界の集まりへ行くため、車で移動中でしたが、電線が非常に揺れ、運転しているのも怖くて車を一旦止めました。おさまって会議へ出席し、帰路につきました。大震災はその 2 日後です。大変強い地震でした。発災



青木 彰人 部長
(当時: 工務課課長)



川守 永朗 部長
(当時: 東北営業所課長代理)



三浦 正人 所長
(当時: 品質管理課課長)



高橋 忍 課長
(当時: 工事担当課員)



菊池 淳哉 次長
(当時: 製造二係主任)

※表記の役職はすべて座談会開催時のものです。

直後、本社で仕事をしていた社員には一度外に避難をしてもらいました。社長は鉄構業界の行事で留守でした。何度も余震があり、そのたびに外に避難してもらいましたが、社員の皆さんには家族のことが気になり、電話をかけたりして仕事が手に付かない状況を見て、残る人だけを会社に残して、一般社員には帰っていました。

ただ、震災直後から岩手県の依頼も受け、応急復旧とか調査とか協力対応も結構やりましたよね？

社長が夕方に帰社され、発電機を事務所に持ってきて電源をとれるようになり、災害本部を立ち上げて、テレビで状況を確認できるようになりました。

最初に目に届いた画像は福島県相馬で津波が7メートルというものでした。その後、今度は宮古で車が流されている様子を見て、これは本当に大変なことが起こったと思いました。平素からお付き合いのある官公庁から要請があったら対応しなければいけないことを想定し、工事部の可能な方に待機をお願いしました。一夜明けて、当社社員が沿岸部へ出向いて現地調査、撮影した写真が届き、大きな水門施設も、アルミ陸閘も流され、めちゃくちゃになっている姿を見て、水の力は本



震災直後の沿岸部



被災した水門の調査



集められた災害支援物資



本当に恐ろしいと感じました。数日後、当社社長が懇意にしている大船渡市の豊島建設社長と連絡がとれ、支援物資の供給について話をしました。ちょうど、当社でJESエレメントを製作しており、納入先のJR西日本金沢支所栗林所長から、支援物資供給の問い合わせが来て、当社を経由して豊島建設さんに届きました。JR西日本支社や現場を施工している建設会社からも含めてトラック1台満載の支援物資を送っていただき、豊島建設さんの本社が流された後の臨時事務所へ持て行きました。

佐々木社長 震災直後から岩手県の依頼も受け、応急復旧とか調査とか協力対応も結構やりましたよね？

菅原専務 応急復旧と調査のため、当社から3グループ編成しました。岩手県全体で5～600ヶ所あったようですが、当社で200ヶ所はやりましたね。

高橋常務 地震発生3日後ぐらいに岩手県庁から水門、陸閘の点検要請があり、私と当時の設計課長の酒井さんと県庁を訪問しました。メーカーとして県から要請のあった会社は当社（県南担当）と北日本さん（県北担当）の2社のみだったはずです。停電のためエレベー

ターが動かず、河川課のある県庁7階まで何度も階段を往復した記憶があります。当社の工場も稼働していなかったので、現場点検には製造部のメンバーも含め、菊池淳哉さんなど複数人、複数車で対応しました。県から優先的に給油できる書類ももらいました。点検時に遺体を発見しても特に処置しなくて良いと指示がありました。大船渡地区では焦げ臭い匂いが充満し重油で汚れていて、水路や上屋内部を点検する際にはブルーシートで覆われている箇所もあり非常に緊張しました。また、調査中に緊急地震速報が鳴ったのを覚えていました。

高橋課長 自分が担当していた陸前高田の旧姉歯橋の補修工事が2週間ほど前に完了していて、現場から引き揚げた直後の震災発生でした。陸前高田市内のほぼ全てが流されて中心市街地は廃墟と化し、よく通ったラーメン屋もどこあるかわからない有様。補修した旧姉歯橋は橋脚から落ち、橋桁はバラバラになりました。別件で私が施工した陸閘2門も、1門は扉体がなくなり戸当りが引きちぎられており、もう1門も瓦礫に埋もれました。

佐々木社長 発災当時の会社の様子はどうでしたか？

三浦所長 震災当初は品質管理課所属で、工場で国交省さん発注のゲートの立会検査でした。これは尋常じゃない揺れだということで、国交省の方が検査をその場で止め



て帰られる事態になり、大変な緊急事態だと思いました。

高橋課長 私は発災当日夜、防犯担当として24時から会社に入りました。夜間、花巻市の職員の方がドラムの電源コードを貸してくれないか、ときました。その日は三浦さん、工事部の照井斉さんも会社に待機していたと思います。投光器を花巻の体育館に届けた記憶もあります。

佐々木社長 災害本部を立ち上げて、当社は発電機を使って夜間も明るくテレビで情報を取れ、地下水もくみ上げましたが、世間は電気もガスも水道もみんな止まっていたので、何かと頼りにされたのだと思います。グループ会社の中央石油でガソリンや軽油の在庫を保持できていたことも大きかったです。青木さんはどうでしたか？



青木部長 その日私は鉄構組合青年部の事業で日立鉄工所さんの工場見学に参加していて、その後一関の千葉鉄工所さんに向かう途中でした。ラジオをつけると地震発生と津波の警報が出していましたが、津波は高さ3メートルくらいと聞いていたので、ここまで大事になるとは思いませんでした。送電線もかなり揺れていましたし、信号は止まっていたが、何とか会社に帰りました。

佐々木社長 川守さんはどうでしたか？



川守部長 私はその頃仙台の東北営業所配属で、清水建設東北支店の近くで監理技術者講習を受けていました。仙台市内も激震でした。家族で仙台に住んでいたので、家に帰ろうとエレベーター式の駐車場から車を出そうと1時間ぐらい粘ったんですが、停電が復旧せず諦めて約10キロの距離

をアパートまで歩きました。歩いている途中仙台駅の方は、火事なのか真っ赤になっていて、強い余震が何度もあり、酔っ払っているような感じでした。2時間半ぐらいかかるて家に着いたのが夜7時半ぐらい。奥さんと子供が無事で抱き合った記憶があります。仙台市内もガソリンが全然手に入らず、治安も悪くなり、泥棒が入ったという事案もよく聞きました。

眞面目に一生懸命向き合った手探りの復興工事 信頼関係を築き、大型物件に挑戦

菅原専務 復興工事の最初は丸島アクアシステムさんとの復興JVで、釜石須賀地区水門・陸閘工事を受注しました。受注してから、実際に動き始めるまで1年ぐらいかかったような気がします。通常の公共工事の量も少なく、県自体が被災しているので非常に時間がかかり、なかなか工事着手できず2年ぐらい苦労した思いがあります。

佐々木社長 いずれ震災復興工事は出て来るだろうと思っていましたが、いつどういうタイミングで出てくるかわからず、震災後数年は全然出て来ないな、という感じでした。



丸島アクアシステム復興JV 須賀地区水門

三浦所長 標準断面発注という言い方をしていましたが、予め設計変更ありきで概算数量と一般図のみで入札を行い、受注者を決定した後に詳細設計を進める感じでした。

菅原専務 須賀地区陸閘は、釜石港に設置されるので日本製鉄釜石製鉄所の総務課に大変お世話になりました。ヤード内に事務所をお借りするとか、敷地の横断許可をとるとか。

佐々木社長 日本製鉄さんは、釜石製鉄所があるので地元企業としての存在感は別格で、震災復興に合わせて開発した新製品であるハイブリッド防潮堤を、日本製鉄東北支店と連携し、素材は日本製鉄、土木エンジニアリングは横河NSエンジニアリング、当社が地元ファブリケーターとして製作と据付を担当する連携をとって営業し、大型受注に結びついたことは画期的でした。また須賀地区陸閘の後から、新たに開発された二相ステンレス鋼が徐々に使われ始めました。

高橋課長 宮古港の藤原地区陸閘で、二相ステンレス鋼が採用された当時日本最大の陸閘設備をJV現場代理人として担当しました。特に藤原1号陸閘は純径間25m、扉高8.22m、走行レール約49mという巨大なものでした。

菅原専務 二相ステンレスは、従来のステンレス鋼より高強度で耐食性、耐孔食性が優れていて、従来品より価格は高くなりますが、レアメタル含有量が少なく、原料価格の変動に対するリスクも



丸島アクアシステム復興JV 藤原地区陸閘

少なく比較的価格が安定しているのが売りでした。

佐々木社長 水門・陸閘の大型工事はほとんどJV案件だったと思います。三浦さんは、JVの窓口をかなりやってもらいましたけれど、どんなことが思い出されますか？

三浦所長 平成26年に品質管理課から営業になりました、須賀水門が初の復興JV案件で、当社が親でした。営業配属になって間もなかったせいもあり最初は子である丸島アクアシステムさんに教えを請いながら進めていました。不慣れで何も分からず、入札後の内訳書の提出はとても緊張しました。今まで扱ったことのない工事費が大きいものばかりで間違えればアウトなので。高橋忍課長とは実行予算、JV予算の作成に携わっていただき本当に助かりました。積算など詳しく理解していない中、現場事務所の手配、釜石製鉄所に土地借用依頼、飯場を造らなければならぬ、などいろいろな課題がありました。これらすべてを丸島アクアシステムさんと一緒に実施出来たので、本当にいい経験をさせてもらいました。

佐々木社長 JVの受注金額は本当に大きくて、早いうちに甲子川水門と大槌・小鎌川水門の2件を

WTOで受注しましたが、2件だけで当社分が20億円ぐらいになりました。

菅原専務 当時、復興工事が始めて3年ぐらいで、鶴住居水門を含めて受注ベース40億円を超えてました。

佐々木社長 特定JVでは、丸島アクアシステムさんが親で、当社は子だから気楽。復興JVだと、当社が親で当社の実績にはなりますがJVの予算管理、工程管理、発注者対応などを当社主導で進めなければならないから、復興JVのほうが大変だったんじゃない？

三浦所長 津波対策用大型水門はWTOで特定JVでしたが、復興JV工事の方が先に出て、丸島アクアシステムさんと複数案件受注出来ましたので、JV2社間で営業を皮切りに、技術、製造、工事等、それぞれ交流が盛んになりました。懇親会もたくさんやりました。当社も若い社員が多かったので、社外の方との交流は技術的にも、人間的にもいい経験になったと思います。橋梁については、北日本機械さんと初めて地元同士で特定JVを構成し、複数件受注して大変盛り上りましたが、とにかく相手に迷惑をかけないよう必死でした。特に、当社が親で北日本機械さんとの特定JVで受注した宮古西大橋は、総重量1800tで契約金額20億円を超える超大型案件。岩手県内企業同士のJVで無事に完成させ、令和元年度の優良工事表彰も受賞しました。岩手県当局に岩手県内企業の底力を示した画期的な物件でした。



北日本機械特定JV 今泉大橋

高橋課長 私が携わった最初の復興JV工事は釜石須賀地区陸閘でした。当初、他の若手現場代理人が担当しておりましたが、

彼もJV工事の進め方をよくわかっておらず私が手伝うことになりました。現場予算を作る時、三浦さんから予算案を頂戴して、現場予算に落とし込んでいくのに非常に苦労しました。何パターンか案を作って、菅原専務のところに持つて行つては「これじゃダメだ」と何回も添削いただきました。専務や監査役の厳しいチェックがあり、何度も修正した記憶があります。現場が始まり、関西から丸島アクアシステムさんが現場に入られる際、正直私も他県の人と仕事をするのは初めてで、どう接したらいいかわからなかったです。最初の打ち合わせに、先方は工事部長、副部長初めそういうたるメンバーで来られました。現場を上手く進めるためには丸島アクアシステムさんと良い関係を築かなきゃダメだと思い、できるだけ現場の雰囲気を良くしようといろいろ考えました。うちの会社のいいところ、うちの会社らしいところを全面に押し出して一緒に仕事を進めていこうと必死に走り回った記憶があります。

佐々木社長 うちの会社のいいところって、どういうところですか？



高橋課長 当然、地元企業ということ。丸島アクアシステムさんは奈良県で関西人が多いので、私たちは岩手県人で、岩手県人らしく愚直で真面目な人格があります。そういうところから信頼もらえるように、現場を進めていこうと考えました。

佐々木社長 丸島アクアシステムさんと一緒に仕事をしていて、こんなことを聞いたら恥ずかしいな、とかそういうことはありました？

高橋課長 ありましたね。最初は聞きたいこともあまり聞いたらよくないのかな、という感じもしましたが、関係性を築いていくうちに、そんなことないな、と徐々に聞けるようになりました。

佐々木社長 逆に相手から見るとどの程度のことまでは分かっている、ということが分かった方が、進めやすいでしょう。ここまでは進めて大丈夫、だからここから教えればいい、と理解してもらえるのは大きい。話してもわからないというのが一番困る。工事の現場においては高橋忍課長が丸島さんとの窓口役だったと思うし、製造においては淳哉さんがそうだったでしょう。



菅原専務 小鎌川水門はうちでシェルゲートを



丸島アクアシステム特定JV 甲子川水門



丸島アクアシステム特定JV 小鎌川水門製作時

造った。造るにあたって淳哉君にはご苦労かけたね。小槌を「うちで造れます」とあなたが言ったのは立派だった。

菊池次長 言いましたっけ？全然覚えてない…。

菅原専務 私としては「大丈夫かな？」と思ったけど「いや、造れます」と。それがあったからこそ、その後の関口川シェルゲート、昨年関東で完成させた古利根堰ゲートにも結びついている。

佐々木社長 どこで分割して、どこを機械加工して、現場溶接でどのように品質と形状を管理するか、精度を要する極厚のシェルゲート製作は大変貴重な経験だったと思います。やり遂げられたのは、丸島さんから当社の製造部が信頼を勝ち得たこと、もともとうちはものづくりにチャレンジしてきたDNAがあるからと思います。



菊池次長 製缶技術を基本にすると、長さ20mの製缶だと通常7～8mmの許容はある。大型のシェルゲートだとダム堰の基準になり、左右1mm以内にどうやって収めるか。以前のうちの工場では歪取りで頑張るという概念しかなかったのが、20mで1mm以内となれば機械加工で仕上げなければ無理。全体は一気に運べませんし、全体を加工できる機械加工機もないし、最後は現場で組み上げて溶接しなければならない。丸島アクアシステムさんに教えてもらいながら、製缶後全体を組んだ状態で各部材に芯を入れ、機械加工代を大きめにとって削り線を入れ、解体後、単品で機械加工を外注し、現場では溶接変形を管理して、最後に許容値内に納めるということで、大変勉強になりました。

菅原専務 端部ブロックは短いわけだよね。そこ

の精度を確保して最終的に数字が合うように加工するんだね。

菊池次長 他の中央部は通常の5mmとかに入つていればいいので、普通に管理していれば許容値に入つてくる感じでした。丸島アクアシステムさんの工場で当社の及川雅玄さんと一緒に2・3日入つて、大型機械製品の精度管理のノウハウを教えてもらいました。

佐々木社長 自社で大型の機械加工機を保有しなくても、外注加工出来る会社があれば十分製造可能ということですね。社内で大型機械加工機を保有しても稼働率を確保出来ないので。

菊池次長 はい。そのつながりから、大型機械加工を当初はアルバックさんにお願いし、今はユーテックさんにお願いして、いずれともよいお付き合いをさせていただいています。

佐々木社長 高橋常務の震災に対する思いは？

高橋常務 私は会社に迷惑かけてしまったという意味で、東日本大震災の復興がまだ道半ばの時に起きた平成28年（2016）の台風10号の被害が思い出されます。平成27年（2015）に受注し、現場代理人として担当した国交省の久慈管内橋梁補強工事の施工中に台風被害を受けました。安家川沿いに設置した現場事務所がまるごと河川に流出して今でも強烈に記憶に残っています。台風が来ることがわかっていたながら、ここまで被害が



台風10号被災時

出るとは想像できませんでした。

※平成28年台風10号被害…岩手県全体で死者20名、行方不明者3名。

佐々木社長 当社の現場事務所はどういう状況だったの？

高橋常務 台風がきているからということで、現場は止まっていたけど書類作成はやる、ということで何人が事務所にいましたので、見回りをして午後6時ぐらいまで書類作成をやって帰りました。夜になって、別の久慈の現場を担当していた工事部員から「アパートから脱出できないので助けてください」と連絡があって、自分のアパートを出てみたら周りが水に浸かっていて、周囲の道路が冠水していたので、私自身も身動きが取れませんでした。久慈市山形町の新芋谷橋を担当していた工事部員からも「出られなくなったので助けてください」と連絡がきました。通行可能な道路を遠回りして助けることができました。早朝水がひいたので現場を確認したところ、現場事務所ごと見当たらず、パソコンや資材など一切合切流されていました。何週間後かに現場に行きましたが、ユニックは近くで埋まっているのを見つけて搬出しました。



佐々木社長 現場事務所で残業でもしていたら、危なく一緒に流されたということ？

高橋常務 だったかもしれません。

菅原専務 車なんかも流されたけども、結局保険下りなかったよね。

高橋常務 災害保険は下りていないんですけど、地元の野田村から権災証明書をもらったので、コピー機とかある程度の補償は受けることができました。大変な経験でしたけれど、おかげさまで成長させてもらったと思います。今の自分があるのもこの震災復興体験を乗り越えたおかげです。

佐々木社長 この復興工事期間中、いろいろな会社を見る機会があったと思います。他社さんへ行って見てみると、うちの会社の良さがわかるようなこともあったのではないか？

菊池次長 資金力がある丸島アクアシステムさんなんかは、必要な機械加工機を全部自社で保有するという考え方。うちは自社工場で造った後、外注さんに協力してもらって、最終的にもちろん自社で責任を持つ。作業台のあり方なども勉強になりました。うちは1回1回物件に合わせて台を持ってきてサイズに合わせて準備しますけど、丸島さんはH鋼を何十mも置いて定盤にして作業台として使う。定まったピッチで全面埋まっていて平らになっているという印象です。天井クレーンの下にサブクレーンがあってクレーン待ちが少な



丸島アクアシステム特定JV 鶴住居水門

い。今はうちも同じようになっています。

佐々木社長 やっぱり工場がきれいだよね。丸島アクアシステムさんとか、旭イノベックスさんとかは、かなりレベルの高い会社だけど、当社の手が届かないほどではない。ちょうどよい目標になって、よいお付き合いをさせていただき、大変勉強になりましたね。

菅原専務 復興の際、製造部長は伊藤誠さんで、青木さんも携わった。工場も外注手配含めて一つ一つが大変な仕事だったので、まとめ上げるのに大変苦労しただろう。

青木部長 大型案件で初めて受注した須賀陸閘はステンレス鋼材を扱うので、社内製作では工場製作の際にステンレスエリアを決めて、鋸対策や酸洗水の処理について、製作前段階の検討にプレッシャーを感じて進めた記憶があります。大型工事の受注により、県外業者に協力してもらう機会も多く、多くの工場を見せていただいたので、大変良い勉強になりました。また丸島アクアシステムさんとのJVで受注した大型物件のおかげで、自社工場で加工していく中でも、会社として相応の利益が上がり、製造出来高の確保に大きく貢献しました。

佐々木社長 WTOのような超大型案件は、難易度が高く大手企業が受注しても利益を確保出来る水準の積算になっていて、利益率が非常に高いことを実感しましたね。大型物件を競って受注して



横河ブリッジ特定JV 川口橋

いかないと大きな利益は取れないことが身に染みました。川守部長は営業的に思い出される苦労にはどんなものがありましたか？

川守部長 大船



渡の川口橋ですね。700tを超える3径間連続箱桁の送り出し架設。横河ブリッジさんと特定JVで当社が親で受注しましたが、総合評価の事前予測ではライバルJVに負けていたので、何としてでも受注しようと低入札にいかざるを得なくて…。

佐々木社長 当時は、低入札制度が今と違っていて、担当技術者を増やしたり、低入札資料をかなり多く用意させられたり、ペナルティ的なものが課されましたけれど、後に影響するほどのこととはなかったですね。

川守部長 完成工事評点はむしろ高かったです。

佐々木社長 今振り返ると、営業戦略的には成功と言えるのでしょうか？

菅原専務 入札の読み次第でしたが、入札参加企業が何社になるかわからず、参加企業の入札金額から低入札基準価格が決まる制度だったので、読みはさほど当てにならず、ある程度金額を下げな



三陸鉄道 小鎌川橋梁

きや勝てないという判断でした。

川守部長 今は岩手県の低入札制度が改正され、低入札しても評価点数に反映されなくなったので、低入札が起こりにくくなりました。

佐々木社長 当社は震災前から公共工事以外の柱として、JR 東日本向けの鉄道橋や、JES エレメントなど、重要構造物を結構なボリュームで担当させてもらっていましたので、震災復興で忙しくなったときでも JR の仕事を切らすこととはしませんでしたね。

青木部長 三陸鉄道や山田線が流され、JR 東日本が担当して復旧・復興の鉄道桁の架け替えを進めましたが、当社でも相



当製作させて頂きました。一番早かったのが、JR 八戸線の橋桁がそのまま流された大浜川橋梁で、ユニオン建設さんも、JR 東日本の盛岡土木技術センターさんと構造技術センターさんも一生懸命になって検討し、流された桁を再利用することになりました。

佐々木社長 当時の JR 東日本の構造技術センター所長、鉄道桁の大御所石橋忠良氏が当社の工場に来られ「この規模と能力の工場がこの位置で稼働



JR 八戸線 大浜川橋梁 被災時

しているのであれば、流された桁をプラスチックで補修して、必要な部材を再製作して、再利用しましょう」と判断して、後に土木学会や橋梁専門誌「橋梁と基礎」で報告されました。当社の工場がなければ、すべて造り直しましたね。

菅原専務 また随分きれいに直しましたよ。プラスチックで塗り直したら新品みたいになった。あれはすごかった。プラスチック後は塩分測定もしたんだろう。

佐々木社長 今だったら F 砂 S 工法を活用して、湿粒プラスチックで塩分除去して再利用、ということになるのでしょうかけど、当時はまだありませんでしたね。

岩手県の復興工事を県内業者が元請け震災復興工事で実績をつくり次のステップへ

佐々木社長 私の立場で震災復興を振り返ると、岩手県当局が当初は手探りだったものの、徐々に岩手県の鉄構業界を信頼してくれるようになってきたということだと思います。以前は、大手橋梁メーカーの団体である日本橋梁建設協会の意向を尊重する感じだったと思いますが、東日本大震災直後の応急復旧に地元メーカーの協力がなければ何も出来ないことを実感し、完成後のメンテナンスも見据えて地元企業の実力を測っていたのだと思います。建設業の中では、鉄構組合は建設専門工事団体の一つにしか過ぎず、岩手県の入札制度



JR 八戸線 大浜川橋梁 架設時

も、基本は県内に何 100 社もある岩手県建設業協会を念頭に置いたもので、状況の異なる鉄構業界に準用すると多少の不具合を生ずるのは織り込み済みという感じです。岩手県鉄構組合として岩手県に要望してもよほどの不具合が生じていないのであれば、逆に他の建設業界に影響を及ぼしかねないという意識もあり、慎重にならざるを得ないこともよくわかりました。しかし震災復興需要も前に、岩手県の鉄構業界がノーガードで大手企業と入札競争すると基本は敵わないで、地元企業の受注チャンスが拡がるように何度も要望を重ね、そうしているうちに相互理解も深まり、これはいよいよ本当に動かないとまずいな、という局面になつて、ようやく動いてもらえたという感覚です。地域精通度の本社加点において当該地域に地元企業がない場合岩手県全体を地元と見なして 0.5 点加点するとか、復興 JV 制度を岩手県で採用してもらえたとか、ちょっとしたことが、最終的に県内企業の受注の実現につながり、岩手県の鉄構業界を大きく成長させることにつながったことを振り返ると、鉄構組合の活動は非常に重要であったと感じます。

震災当時、岩手県鉄構組合には、社会インフラについて活動する特別の組織はありませんでした。理事長は小山田工業所社長小山田周右氏、副理事長はカガヤ社長加賀谷輝男氏、佐々木鉄工所の故佐々木英則氏、そして私の 3 人で、私が一番若かった事もあり、岩手県当局への要望書のシナリオは私が書いて、理事会で承認していただき、岩手県要望の機会をつくり、事前説明へ行っていました。



JR 八戸線 大浜川橋梁 令和 7 年現在の写真



岩手県当局も水門・陸閘の応急復旧の際、地元企業の応援がなければどうしようもないことを実感され、水門・陸閘設備完成後の点検・整備も地元企業がなければなしえないことを理解されたようで、岩手県鉄構組合がパートナーとして認知されるようになりました。徐々に話しが囁き合うようになってきました。震災後 7 年経過した平成 30 年に私が理事長に就任し、社会インフラ部会を立ち上げ、その後も毎年継続して当局とコミュニケーションをとり、信頼関係を熟成させて今に至っています。岩手の社会インフラを、岩手の地元企業により設計、製作、据付、メンテナンスまで担当するようになったことであり、震災後の岩手にとって最大の社会変化の一つと言えると思います。地元への経済効果も大きく、地元に継続雇用を生み出し、技術者も育ち、これこそ岩手県が本当の復興として目指してきたものであろうと思っています。